画：イマイ カツミ「雲場池」

軽井沢 karuizawa グランドデザイン grand design

contents

軽井沢 22 世紀へのはばたき

軽井沢 100 年グランドデザイン

軽井沢エリアデザイン

旧軽井沢地区

新軽井沢地区

中軽井沢地区

追分地区

南地区

5つのエリアを結ぶ軽井沢の新しいふるさと・未来交通

軽井沢これまでとこれから

- 1884 碓氷新道開通
- 1886 英国聖公会宣教師アレキサンダー・クロフト・ショーが軽井沢を訪れる
- 1888 ショーが大塚山に別荘を建てる
  鉄道直江津ー軽井沢間開通
- 1893 八田裕次郎（海軍大佐）が日本人初の別荘を建てる
  アプト式により横川ー軽井沢間開業
  上野ー直江津間全通
- 1916 ダニエル・ノーマンらによって（財）軽井沢避暑団設立
  （避暑客の自治組織）後の（財）軽井沢会
- 1923 軽井沢町 町制施行
- 1951 軽井沢国際親善文化観光都市建設法公布
- 1953 浅間山及び軽井沢周辺米軍演習地設置反対大会
- 1958 軽井沢町の善良なる風俗維持に関する条例制定公布
- 1964 東京オリンピック総合馬術競技開催
- 1971 碓氷バイパス開通
- 1972 軽井沢町の自然保護対策要綱制定
- 1973 軽井沢町民憲章制定
- 1993 上信越自動車道開通
- 1994 上信越自動車道碓氷軽井沢 IC よりアクセス道開通
- 1997 北陸新幹線（長野新幹線）開業
- 1998 長野冬季オリンピックカーリング競技開催
- 2001 マンション軽井沢メソッド宣言
- 2005 軽井沢まちなみメソッド宣言
- 2007 まちづくり基本条例制定
- 2013 **「軽井沢グランドデザイン」作成**
- 2014
- 2015 北陸新幹線（長野ー金沢間）開業
- 2035

人口予測	2010 年（平成 22 年）		2040 年（平成 52 年）	
全　国	127,768,000 人	→	107,276,000 人	（約 16%減）
長野県	2,196,114 人	→	1,668,415 人	（約 24%減）
軽井沢町	17,714 人	→	16,662 人	（約　6%減）

※国立社会保障・人口問題研究所（H25.3 月）

人口減少：全国的に人口減少が顕著となるが、軽井沢町では微減と予測されており、大都市同様の傾向が示されている。この動向を如何に捉えるか？

- 2060 **軽井沢エリアデザイン**
- 2100 **少子超高齢化**　日本の 65 歳以上人口が全体の 32%を占める
- 2110 **地球温暖化**　日本の平均気温が 4.8 度上昇 夏の関東地方が九州南部なみの暑さとなる

軽井沢 100 年グランドデザイン

軽井沢22世紀へのはばたき

手をつないで　新しい軽井沢へ

このたび、「軽井沢 22 世紀へのはばたき」と題して、軽井沢の 50 年後・100 年後のグランドデザインを作成しました。5 年先もわからない流れの速い現代社会で、そんな先のビジョンが必要なのかと感じられる方もいらっしゃることと思います。しかし、私は流れの速い社会だからこそ、未来の町のあり方を考えておくことが重要だと考えています。ここに表現したものは、未来予測でもなく将来予想クイズでもありません。

自分たちの町「ふるさと軽井沢」の未来をこうしたい、こうあってほしいとする想いです。これをまとめあげる過程では、事前のパブリックコメント、町民・別荘住民の代表からのヒアリング、児童・生徒の町の未来図作成など、多くの方たちからご意見やご協力をいただきました。そして、2 年以上にわたって、中村良夫委員長はじめ未来構想会議委員の皆さまには、ご専門の見地から洞察に富んだ深い議論を重ねていただきました。ご協力いただいたすべての皆さま方に厚くお礼申しあげます。

町では都市マスタープランや長期振興計画等を作成して行政運営を行っていますが、このビジョンに込められた想いや示唆を具体的施策に落とし込んでいくことはもちろん、まちづくりの将来に向けての貴重な参考として引き継いでまいります。

町民、別荘住民、事業者、観光来訪者など、幅広い方々に日常生活や経済活動、保養や余暇活動などのそれぞれの立場でお役立ていただき、新しい軽井沢に向かって、しっかり手をつないでまいりましょう。

平成 26 年 12 月

軽井沢町長　藤巻 進

軽井沢グランドデザイン作成に伴い小学生に絵画を募集（平成 25 年度）
テーマ「50 年、100 年先の未来の軽井沢」
小学生の部　優秀作品

なつかしい未来へ！ ふるさと軽井沢の継承と発展

ふるさと軽井沢の継承と発展

「**ふるさと**」とは何でしょうか？それは美しい山河やまち並み、元気な創造活動、そして人と人の絆を束ねながら、代々の祖先が築いてきた郷土の肖像、つまり**風土**です。

優れた芸術家や詩人も参加しながら描き、継承してきたふるさと軽井沢の風土は「**高原保養都市**」ではないでしょうか。

高原保養都市の基調は「軽井沢モダン」

浅間山の麓のさわやかな草原を下絵に、営々として描かれてきた明治以降のふるさとの姿、あるいは**風土の香りを軽井沢モダンと呼びましょう**。緑の風のような信州の風土に西欧の光が射し込んだ軽井沢モダンというふるさとの基調を、都市、建築、食文化、工芸、スポーツ、社交へと発展させたところに、未来の高原保養都市が見えてきます。

どうつくる未来のふるさと？

ふるさとは、母なる大地の懐で人々が力をあわせ、自助の心で切り拓いてきた風土です。それを「**風土自治圏**」と呼んで良いでしょう。

風土自治圏は、軽井沢モダンの精神にそったデザインの３分野を融合させながら美しい肖像、あるいは物語として結晶していくでしょう。すなわち、人の絆を紡ぐ**地域社会のデザイン**、母なる大地を慈しみ、清く住み良い都市を工夫する**環境のデザイン**、心身の元気を支援する**創造活動のデザイン**です。このように、住民の自らの創意により生成する風土を、行政が後押しします。このような**風土自治の苗床**として「**22 世紀風土フォーラム**」を提案します。

22 世紀風土フォーラムとは？

22 世紀風土フォーラムは、軽井沢食文化創成サロンを出発点にみんなでわいわい楽しく過ごしながら、人と人をつなぎ、魂の寄る辺としてのふるさとを提案してゆく設計工房であり、知的交流の広場です。そこに、公と私の境を越えた「私たち」の風土自治の泉が湧いているでしょう。

グランドデザインは答えでなく問題提起

この冊子に描かれた画像は、答えではなく問題提起です。**着地点よりも進むべき方向**を、あるいは未来をみる視点を、生産よりも生活で、数字よりもシナリオにより、**ライフスタイル**の絵姿として問題を暗示しました。

とはいえ、軽井沢の未来グランドデザインは絵空事ではありません。なぜなら、ライフスタイルの創成こそが、地場経済の活力を呼び込むからです。しかも、軽井沢発地市庭（ほっちいちば）、風越スポーツパーク、追分のまち並み、大賀ホール、スマートコミュニティ構想、くつかけテラス・・・などの、めざましい過去の達成、近未来の構想など、すべてここに織り込まれているからです。

私たちは 22 世紀へ向けて、**すでにはばたき始めています**。

軽井沢100年グランドデザイン

高原保養都市・風土自治圏

風土自治をめざす主な５つの景

1 演出される風土

2 主役は22世紀 風土フォーラム

3 浅間の視線を 浴びよ！

4 スポーツで結ぶ まち、とち、いのち

5 軽井沢モダンという ライフスタイル

エリアデザインとしての５つの景

6 「美しい村」の 未来へむけて

7 アートも建築も 風土の襞から 生え上がる

8 蘇るふるさと 歩け！沓掛 浅間が見てる

9 転生する宿場の おもかげ

10 生命の豊饒（ほうじょう） はじける元気

暮らす・食べる・楽しむ軽井沢の景

11 縄文の大地 を生きる

12 馬も仲間だ みんなの野道

13 質朴という エレガンス

14 軽井沢の、冬

15 籬（まがき）を囲う山の裾 コブシの花の 散りかかる

16 風景の元気は 有事のそなえ

17 食文化の原点は 地産地消

18 文学は暮らしと 融合して 文化になる

19 路面電車 軽井沢を走る

20 高原文化圏を つなぐ風景街道

※1～20の言葉は、解説版（9～10頁）で詳しく説明しています。

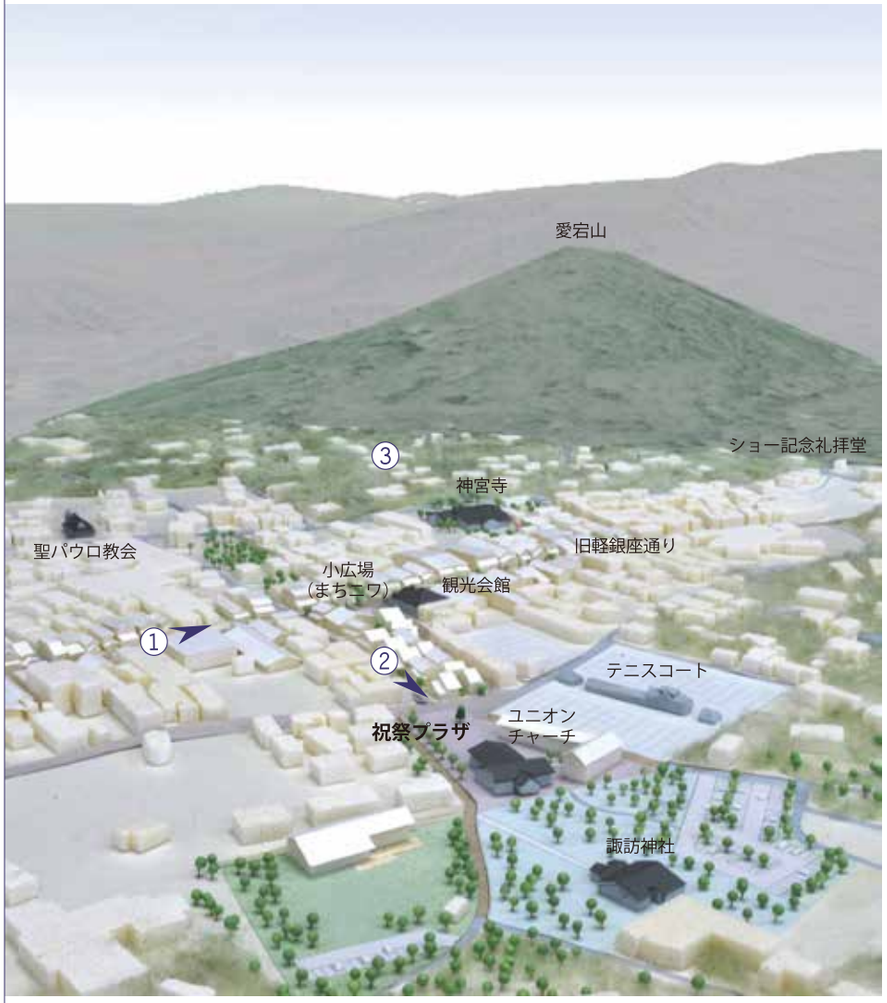
旧軽井沢 地区における歴史と伝統のデザイン

「美しい村」の未来へむけて

浅間石の石垣としっとりした苔の庭に囲まれてたたずむ木造別荘群は、高原保養都市軽井沢のシンボル的な存在ですが、残念なことに老朽化が進んで建て替えられたり、世代が代わって放棄されるケースも多く、替わって小割の別荘地やマンション型別荘が登場して、原風景が破壊の危機に瀕しています。

保有のための制度作りや所有者、購入者の理解と協力のための支援が必要です。また旧軽井沢地区に点在するキリスト教系教会や寺社など、宗教関係の施設は軽井沢の歴史を特徴づける文化財でもあります。

旧軽銀座の賑わいに清々しい水を流し、これに直交するように、深い森に包まれた祈りの空間を配しながら、その交点に居心地の良い小広場（まちニワ）をもうけましょう。こうして野バラとアカシアが点在する「美しい村」の渋い透明を継承し発展して、軽井沢モダンが型になります。



成熟する旧軽銀座通り　①

浅く清らかな水流は、江戸時代に当地に流れていた水路を再生した姿です。細い水の流れは、車両交通を妨げることなく、旧軽銀座通りをくだります。この水流の導入をきっかけに、まち並みの意匠も改善し、歴史ある旧軽井沢の品格を高めます。

賑わいを創出する祝祭プラザ　②

ユニオンチャーチを引き立てる広場は、イベント時には舞台空間ともなります。この教会広場と旧軽銀座通りは接続する街路を拡幅することで回遊性を獲得し、新たな小広場（まちニワ）がその結節点となります。旧軽銀座通りと直交するユニオンチャーチと聖パウロ教会とを結ぶ人々の流れが生まれ、歴史の厚みを感じられる地区へと発展します。

別荘地の保全　③

アレキサンダー・クロフト・ショーが軽井沢を訪れて以来、1世紀余りの年月をかけて築かれてきた静穏な別荘地を、豊かな自然とともに未来へ向けて保全していきます。

文化拠点としての新軽井沢のデザイン

アートも建築も、風土の襞（ひだ）から生え上がる

軽井沢の風土は、多くの文人墨客を輩出し、一方では多くの美術館を抱えて古今東西の芸術作品の宝庫ともなっています。

また 2005 年の大賀ホールの開館以来、世界の音楽ファンの注目を集め、新軽井沢エリアを中心に、文化の熱気が沸き上がっています。

一方で近代の諸芸術はアート、非アートの境界が曖昧になるなか不安定でダイナミックな感動の揺らぎが起きており、文化や芸術の高エネルギー反応のるつぼとしての軽井沢から発する創造性と感動は、新しいスタイルのおもてなしでもあります。

こうした文明的な流れに沿って新しい芸術・文化祭を提起したり日本の古典芸術との接点を探るなどして、軽井沢モダンを象徴する企画も魅力的です。

このような展望に立つとき、この地区は軽井沢物語の始まりに相応しい玄関口“ステーションフロント”として思いきった転換が望まれます。

軽井沢駅前から矢ヶ崎公園に至る一帯は、高原性の緑の大地の中に個性的な軽井沢モダンの建築、橋、道、そして樹木までもが響き合い、全体が国際会議場の立地にふさわしいアートガーデンになるように提案しました。アートも建築も道もそれぞれの固い殻から解放されて風土に融け込みます。そのようなランドスケープのなかに数多くの美術館への誘いとなる、ゲートミュージアムを配置してはどうでしょう。

ステーションフロントの創出　①

軽井沢駅の北口デッキに立つと、眼の前には高原保養地を象徴する大きな芝生広場が広がり、店舗やミュージアムの入った建築群の先には、矢ヶ崎公園の水面や大賀ホールまでも望むことができる、そんな軽井沢固有のステーションフロントを創出します。

駅前通りの発展　②

軽井沢駅前の通りに旧軽井沢まで続く LRT を導入します。随所に乗降場があるので気ままに散歩しながら、都合に応じて LRT に乗車できます。沿道の建物も、時間をかけながら軽井沢の玄関口らしい構えに設えていきます。

生まれ変わる矢ヶ崎公園　③

公園内の池を柔らかな形に整え、水路を引き込み、ボードデッキ、桟橋、そして国際会議場を添えることで、多種多様な活動を誘発します。まちなかで浅間山を仰ぎながら楽しむ飲食や、浅瀬での水遊び、水辺に映える会議の風景など、軽井沢の風土性を凝縮した活気ある公園へと生まれ変わります。

生活拠点としての中軽井沢の重み

蘇るふるさと、歩け！沓掛、浅間が見てる

国の人口推計によると、2040 年の軽井沢町の人口は 2,000 人余りの減少と予想されています。国民総人口が 1 億 700 万人余りまで落ち込む予想を前提とすれば、まだまだ元気のある自治体グループに入っていますが、入込客の動向いかんでは油断できません。

住民の4分の1が集中する中軽井沢エリアは生活者ゾーンとしての拠点性が顕著であり、他のエリアとは異なる生き残りの手法をさぐる必要がでてきます。役場、病院、学校、駅と図書館、郵便局、金融機関、商工会館や各種商業施設、日常的飲食店などなど…。

第一テーマの高原保養都市とは全く別の顔の地方都市の中心街、コンパクトシティのモデルでもあります。浅間山と湯川を拠り所にした生活者のための歩行・自転車生活圏をどうデザインするか。これを皆で勉強する未来研究センターとしての「22 世紀風土フォーラム」のテーマとして考察してみてはどうでしょうか。

国道より北の街区を流れている沓掛用水は、未来の中軽井沢を決める大事な資源です。網の目状にながれる水網広場は、ふるさと沓掛の新しい顔になります。

くつかけテラスを活かしたまちづくり ①

ゆったりとした歩道を備えた駅前の街路は中軽井沢を象徴するくつかけテラスの全貌を切り取ります。歩行者を主役とする駅前広場は、マーケットの開催場としても利用可能であり、商店街を活気づける起爆剤にもなりえます。こうしたスペースも備えたくつかけテラスの一角に「22 世紀風土フォーラム」の拠点を置き、様々な可能性を模索していきます。

くつかけのまち並みの展開 ②

見通しの良い芝生の帯が広がる街路は、くつかけテラスを焦点とするまち並みの主軸です。沿道のまち並みは、くつかけテラスを参照し地場材を使用しながら伝統様式の中にモダンなセンスで仕上げ、中軽井沢らしい風情を演出していきます。

駅周辺街区の活性化 ③

水路沿いに顔を向けるお店や、水路を活かした庭、水場を囲んだ溜まり場、テラスなど、宅地の合間を縫って流れる水路網により、中軽井沢は、歩いて楽しめる住宅地・商店街へと生まれ変わります。

歴史街道としての追分ルネッサンス

転生する宿場のおもかげ

外国人の手によって別荘地として開発された 100 年以上前、江戸時代から中山道の宿場町として栄えていた軽井沢町、その中心になっていたのが追分宿です。中山道と北国街道が分岐する交通の要衝として、旅籠や茶屋などが百軒近くも軒を連ねていたということで、追分こそが軽井沢の賑わいの原点だったともいえます。追分宿郷土館が整備され、近年は街路整備や駐車場、休憩所が整い、街道筋の面影が戻りつつありますが、休業や閉店を余儀なくされる商店、空き家化する住宅もあり全体のまち並み整備は終わっていません。

商店の誘致を含めた建造物対策、生垣や板壁などによるまち並み修景に加えて、歴史街道に相応しい、歩いて楽しむ追分宿のルネッサンス事業に向けて、民間資本の導入と行政からの支援が合体したまちづくり会社の設立が期待されます。

美しく年を重ねるこの場所は、芸術・文学に心惹かれる人々を引きつける磁場でもあり、宿場通りと分去(わかさ)れを歩道でつないで一体化することも街道復活の方策の一つです。

分去(わかさ)れと街道の接続　①

中山道と北国街道の分岐点、分去(わかさ)れまで、歩行者空間を引き伸ばします。歴史的な遺構を、観光名所、散歩の目的地に位置づけなおすことで、追分の賑わいの拠点をつなぎ、地区の空間的な厚みを増します。

「軽井沢モダン」の発展　②

街道沿いには、既に追分の「軽井沢モダン」を牽引する品の良い建物、魅力的な飲食店が点在しています。この流れを継承し、街道全体の質を引き上げ、「軽井沢モダン」の更なる発展を目指します。

国道から追分地区への玄関口の設置　③

国道沿いに車をとめ、木立を抜けると追分のまち並みが広がります。国道からその存在に気付きづらかった、追分地区に新たな玄関口を設けることで、アクセス性の向上を図ります。

スポーツと農業のセンターとして先駆ける 南地区

生命の豊饒（ほうじょう）、はじける元気

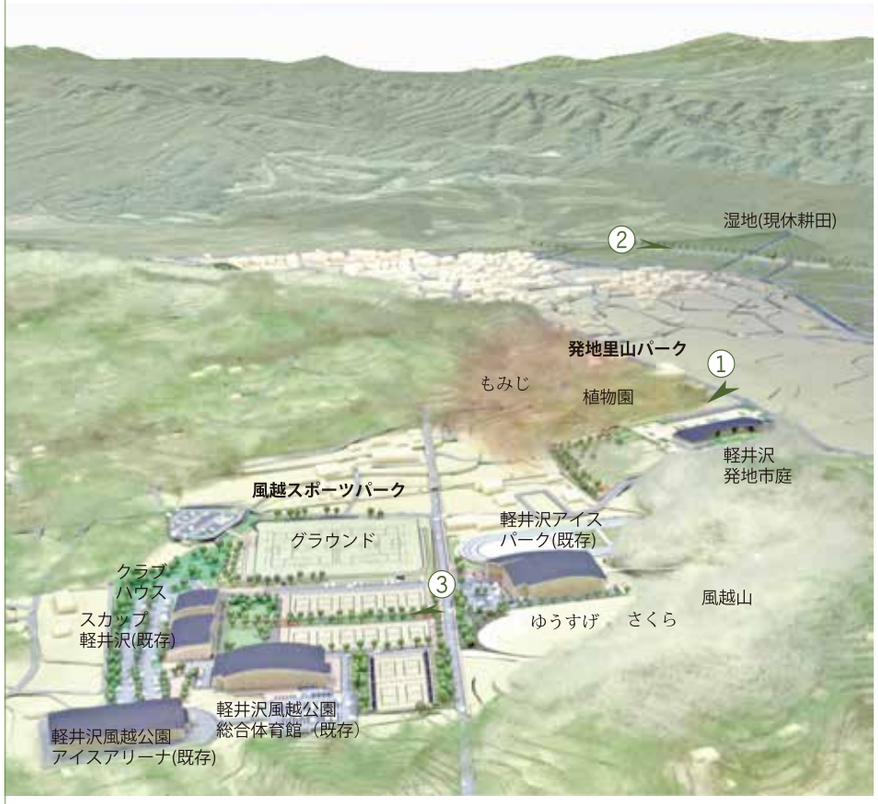
軽井沢町が目指す高原保養都市にとって、スポーツは先行き有望なテーマであり、その中心的役割を果たすうえで、風越地区に集結する各種施設を有効に結びつけ、全国に向けてその存在を発信することが大切です。

とりわけカーリングやアイスホッケーなどのウインタースポーツを通年スポーツに切り替えて活動の幅を広げていくうえで、軽井沢に集まる期待はかなりのレベルにあります。

このような期待に応えるため、植物園と野球場を発地へ移して余裕を生みだすことにより産まれる上品な緑の遊歩道とクラブハウスは「風越スポーツパーク」の交流と社交の場所になります。

また、風越に隣接して創られる農産物等直売施設「軽井沢発地市庭（ほっちいちば）」は、物販施設の域を超えて集約型・参加型農業経営のセンター的役割を担うほか、軽井沢モダン好みの新しい食文化を提案する実験レストランの併設が望まれます。

周辺の里山や鳥類の楽園となっている休耕田湿地を含めた全体を「発地里山パーク」と位置付け、風越から発地へ移転する植物園は、昆虫、魚類、鳥類、ほ乳類を含むあらゆる里山生態のインキュベーター（養育苗圃センター）にするのが良いでしょう。さらにまた里山斜面の林相を改良し、サクラ、コブシ、モミジなどの景観林を育成するほか、ホウの木、カヤなど工芸材料や食用林産物生産の可能性を探りましょう。



農とスポーツの融合・発地里山パーク ①

浅間山を仰ぎながら植物園を散策し、発地市庭のレストランで食に興じるなど里山を満喫できる場所を目指します。山腹に植樹したモミジの紅葉と合わせて、発地市庭には旬モノが出揃います。

休耕田の活用 ②

道路脇に設けた自転車道やホース・トレッキングコースの正面には、裾野を広げた浅間山の姿が広がっています。あたりの湿地は、バードウォッチングには格好の場所です。人と動物がふれ合う羊牧場や馬事公苑等の施設の開発は心と身体の健康を育む「里山セラピー」の場としてもふさわしく、いざという時には食糧基地として元に戻すことも可能な軽井沢の自然財産です。

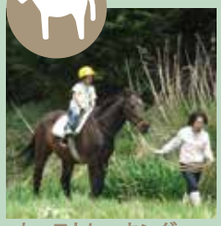
交流する各種スポーツ ③

新しいクラブハウス、その前面に広がる緑地は、スポーツ愛好家の飲食休憩、談話スペースとなり、またキッズパークとして子どもたちの遊びスペースを提供します。

5つのエリアを結ぶ

軽井沢の新しいふるさと・未来交通

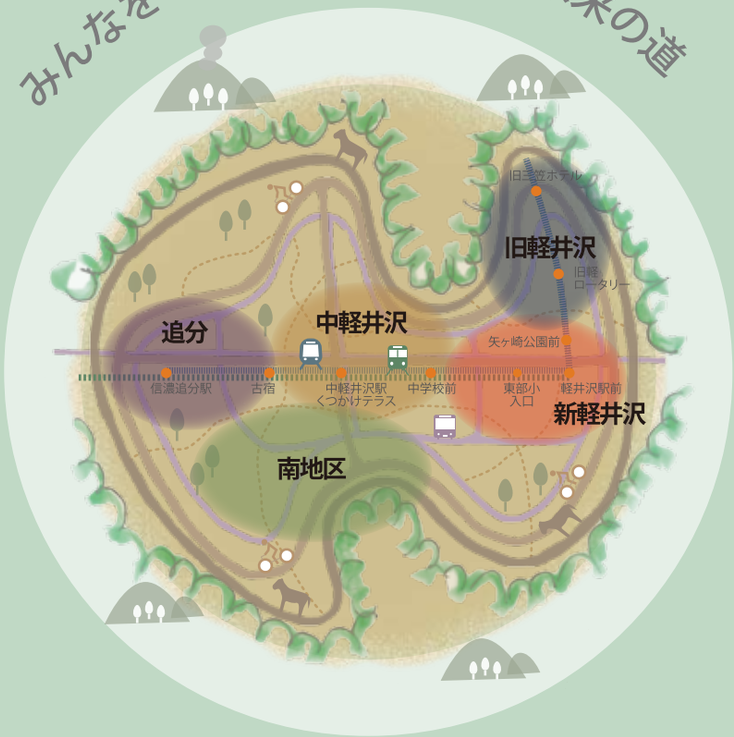
サイクリングネットワーク



ホーストレッキング

ウォーキング
（ぶらぶら歩き）

みんなをつなぐ 懐かしい径、未来の道



LRTネットワーク
※しなの鉄道との連係

しなの鉄道

コミュニティバス
オンデマンドタクシー

※軽井沢グランドデザインの作成にあたって、平成 25 年度から「軽井沢未来構想会議」を開催し、検討してきました。

軽井沢未来構想会議委員

委員長	中村　良夫	東京工業大学名誉教授
委員	浅野　光行	早稲田大学名誉教授
	黒須　充	順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科教授
	進士　五十八	東京農業大学名誉教授
	花里　俊廣	筑波大学大学院人間総合科学研究科教授
	森山　明子	武蔵野美術大学造形学部教授
	安島　博幸	立教大学観光学部教授
	藤巻　進	軽井沢町長
	横島　庄治	軽井沢町企画課都市デザイン室参与

（順不同・敬称略・平成 26 年 12 月現在）

軽井沢グランドデザイン

○全体監修
中村　良夫　東京工業大学名誉教授
二井　昭佳　国士舘大学准教授
（公財）都市づくりパブリックデザインセンター

○全体デザイン
小野寺康都市設計事務所

○軽井沢 100 年グランドデザイン（作画）
イマイ　カツミ

○表紙・レイアウト基本デザイン
アトリエ T-plus 建築・地域計画工房

○「軽井沢 22 世紀へのはばたき」の絵画
左　東部小学校 4 年（当時）　塚本　羽菜さん
中　西部小学校 6 年（当時）　辺見　沙弥さん
右　中部小学校 5 年（当時）　川上　梨帆さん

編集・発行
軽井沢町
〒389-0192　長野県北佐久郡軽井沢町大字長倉 2381-1

発行日
平成 26 年 12 月